

損益計算書

(単位:千円)

科 目	平成28年度 平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで	平成29年度 平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで
経常収益	4,183,412	3,952,929
資金運用収益	3,368,500	3,202,449
貸出金利息	2,071,141	2,029,174
預け金利息	234,887	224,961
有価証券利息配当金	1,031,609	913,615
その他の受入利息	30,861	34,697
役務取引等収益	402,008	415,149
受入為替手数料	220,716	215,386
その他の役務収益	181,291	199,763
その他業務収益	124,953	22,398
外国為替売買益	486	—
国債等債券売却益	72,081	—
国債等債券償還益	387	489
その他の業務収益	51,999	21,909
その他経常収益	287,949	312,932
株式等売却益	275,104	302,983
償却債権取立益	351	—
その他の経常収益	12,493	9,949
経常費用	3,606,018	3,317,409
資金調達費用	129,460	104,046
預金利息	119,585	99,008
給付補てん備金繰入額	9,214	4,381
その他の支払利息	660	656
役務取引等費用	300,307	304,269
支払為替手数料	76,389	76,265
その他の役務費用	223,917	228,003
その他業務費用	191	772
外国為替売買損	—	350
国債等債券償還損	37	202
その他の業務費用	154	219
経費	2,999,690	2,893,354
人件費	2,018,228	1,921,802
物件費	949,959	940,563
税金	31,502	30,988
その他経常費用	176,368	14,967
貸倒引当金繰入額	115,024	4,656
株式等売却損	1,274	3,855
偶発損失引当金繰入額	42,794	1,715
繰上預金払戻損失引当金繰入額	11,182	4,003
その他の経常費用	6,092	735
経常利益	577,393	635,520

(単位:千円)

科 目	平成28年度 平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで	平成29年度 平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで
特別利益	2	—
固定資産処分益	2	—
特別損失	11,339	51
固定資産処分損	68	51
減損損失	11,270	—
税引前当期純利益	566,056	635,469
法人税、住民税及び事業税	131,833	126,392
法人税等調整額	10,554	38,892
法人税等合計	142,387	165,284
当期純利益	423,669	470,184
繰越金(当期首残高)	456,727	367,538
当期末処分剰余金	880,397	837,723

(注) 1.記載金額は千円未満を切り捨てて表示しております。

2.出資1口当たり当期純利益額34円43銭

業績のご報告

剰余金処分計算書

(単位:円)

科 目	平成28年度 平成28年4月1日から 平成29年3月31日まで	平成29年度 平成29年4月1日から 平成30年3月31日まで
当期末処分剰余金	880,397,060	837,723,571
積立金取崩額	777,500	2,792,450
利益準備金限度超過取崩額	777,500	2,792,450
剰余金処分額	513,635,791	513,611,588
普通出資に対する配当金	(年2%)13,635,791	(年2%)13,611,588
特別積立金	500,000,000	500,000,000
繰越金(当期末残高)	367,538,769	326,904,433

平成29年度における貸借対照表、損益計算書及び剰余金処分計算書(以下、「財務諸表」という。)の適正性、及び財務諸表作成に係る内部監査の有効性を確認しております。

平成30年6月19日
富士宮信用金庫

理 事 長

山本 勝則

平成28年度及び平成29年度の貸借対照表、損益計算書及び剰余金処分計算書は、信用金庫法第38条の2第3項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。

- 注1. 記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示しております。
- 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - 有形固定資産の減価償却は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法を採用しております。また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	19年～50年
その他	3年～20年
 - 無形固定資産の減価償却は、定額法により償却しております。なお、自庫利用のソフトウェアについては、在庫内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
 - 外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。
 - 貸倒引当金は、予め定めている償却・引当金規程により、次のとおり計上しております。「銀行等金融機関の資産の自己査定並びに貸倒償却及び貸倒引当金の監査に関する実務指針」(日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号)に規定する正常先償債及び要注意先償債に相当する債権については、一定の種類毎に分類し、過去の一定期間における各々の貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。破綻懸念先償債に相当する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち必要と認められる額を計上しております。破綻先償債及び実質破綻先償債に相当する債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除した残額を計上しております。すべての債権は、資産の自己査定基準規程に基づき、営業関連部門等が資産査定を実施し、当該部門等から独立した資産監査部門が査定結果を監査しており、その査定結果により上記の引当を行っております。
 - 賞与引当金は、職員への賞与の支払いに備えるため、職員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。
 - 役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。
 - 退職給付引当金は、職員の退職給付に備えるため、「退職給付会計に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準委員会企業会計基準適用指針第25号)に定める簡便法(退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法)により、当事業年度末における必要額を計上しております。
 - 当金庫は、複数事業主(信用金庫等)により設立された企業年金制度(総合設立型厚生年金基金)に加入しており、当金庫の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、当該年金制度への拠出額を退職給付費用として処理しております。なお、当該企業年金制度全体の直近の積立状況及び制度全体の拠出等に占める当金庫の割合並びにこれらに関する補足説明は次のとおりであります。

(1) 制度全体の積立状況に関する事項(平成29年3月31日現在)	
年金資産の額	1,634,392百万円
年金財政計算上の数理債務の額と最低責任準備金の額との合計額	1,793,308百万円
差引額	△ 158,915百万円
(2) 制度全体に占める当金庫の掛金拠出割合	
平成29年3月31日現在	0.119%
(3) 補足説明	
上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高214,616百万円及び別途積立金55,700百万円であり、本制度における過去勤務債務の償却方法は期間19年0ヶ月の元利均等定率償却であり、当金庫は、当事業年度の財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金21百万円を費用処理しております。なお、特別掛金の額は、予め定められた掛金率を掛金拠出時の標準給与の額に乘じて算定されるため、上記(2)の割合は当金庫の実際の負担割合とは一致しません。	
 - 役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。
 - 偶発損失引当金は、信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
 - 睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求による支払いに備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。
 - 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式により行っております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。
 - 理事及び監事との間の取引による理事及び監事に対する金銭債権総額 2百万円
 - 有形固定資産の減価償却累計額 2,738百万円
 - 貸出金のうち、破綻先償債額は26百万円、延滞債権額は11,486百万円であり、なお、破綻先償債とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立または弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先償債及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。
 - 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額はございません。なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先償債及び延滞債権に該当しないものであります。
 - 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額はございません。なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先償債、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。
 - 破綻先償債額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は11,512百万円であり、なお、17から20に掲げた債権額は貸倒引当金控除前の金額であります。
 - 手形割引は、業種別監査委員会報告第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた、商業手形の額面金額は4,974百万円であり、また、担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	有価証券	308百万円
担保資産に対応する債務	別段預金	194百万円

 上記のほか、内国為替決済取引等の担保として、預け金6,012百万円を差し入れております。
 - 出資1口当たりの純資産額 2,626円69銭
 - 金融商品の状況に関する事項
 - 金融商品に対する取組方針

当金庫は、預金業務、融資業務および市場運用業務などの金融業務を行っております。このため、金利変動による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合的管理

- (ALM)をしております。
- 金融商品の内容及びそのリスク

当金庫が保有する金融資産は、主として事業地区内のお客様に対する貸出金です。また、有価証券は、主に債券、投資信託及び株式であり、満期保有目的、その他有価証券を保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。一方、金融負債は主としてお客様からの預金であり、流動性リスクに晒されております。
 - 金融商品に係るリスク管理体制
 - 信用リスクの管理

当金庫は、融資事務規程及び信用リスクに関する管理諸規程に従い、貸出金について、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、保証や担保の設定、問題債権への対応など信用管理に関する体制を整備し運営しております。これらの信用管理は、各営業店のほか融資部により行われ、また、規程に沿った経営陣による審査会、定期的な関連部署による信用リスク管理委員会を開催し、審議・報告を行っております。さらに、与信管理の状況については、融資部がリスク管理委員会へ報告し検討しております。有価証券の発行体の信用リスクは、企画部において、信用情報や時価の把握を定期的に行うことで管理しております。
 - 市場リスクの管理
 - 金利リスクの管理

当金庫は、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。市場リスクに関する要領等において、リスク管理方法や手続等の詳細を明記しており、理事会において決定された市場リスク管理方針に基づき、実施状況の把握・確認、今後の対応等の協議を行っております。日常的には企画部において金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、定期的に理事会に報告しております。
 - 為替リスクの管理

当金庫は、為替の変動リスクに関して、個別の案件ごとに管理し、継続的にモニタリングを行っております。
 - 価格変動リスクの管理

有価証券を含む市場運用商品の保有については、ALM委員会の方針に基づき、理事会の監督の下、有価証券・預け金等運用規程に従い行われております。このうち、財務部では、市場運用商品の購入を行っており、投資限度額の設定のほか、継続的なモニタリングを通じて、価格変動リスクの軽減を図っております。保有している株式については、企画部で市場環境や財務状況などをモニタリングしています。これらの情報は企画部を通じ、理事会及びALM委員会において定期的に報告されております。
 - デリバティブ取引

デリバティブ取引は行っておりません。
 - 資金調達に係る流動性リスクの管理

当金庫は、ALMを通じて、適時に資金管理を行うほか、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。
 - 金融商品の時価等に関する事項

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあり得ます。なお、金融商品のうち貸出金、預け金、預金積金、借入金については、簡便な計算により算出した時価に代わる金額を開示しております。
25. 金融商品の時価等に関する事項
- 平成30年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります(時価の算定方法については(注1)参照)。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には省略していません(注2)参照。また、重要性の乏しい科目については記載を省略しております。(単位:百万円)

	貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 預け金(*1)	118,154	115,776	△2,378
(2) 買入金銭債権	100	100	0
(3) 有価証券	-	-	-
売買目的有価証券	-	-	-
満期保有目的の債券	-	-	-
その他有価証券	100,514	100,514	-
(4) 貸出金(*1)	127,155	-	-
貸倒引当金(*2)	△1,795	-	-
	125,359	123,223	△2,135
金融資産計	344,129	339,615	△4,513
(1) 預金積金(*1)	313,231	313,272	41
(2) 借入金(*1)	1	1	-
金融負債計	313,232	313,273	41

- (*1) 預け金、貸出金、預金積金、借入金の「時価」には、「簡便な計算により算出した時価に代わる金額」を記載しております。
- (*2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。
- (注1) 金融商品の時価等の算定方法
- 金融資産
- 預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、直近1ヵ月以内に新規で預け入れた場合の金利で割り引いた現在価値を時価に代わる金額として記載してあり

- ます。
- (2) 買入金銭債権
買入金銭債権は、取引金融機関から提示された価格によっております。
- (3) 有価証券
株式、投資信託、出資金及び債券は、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格、または公表された基準価格によっております。
なお、保有目的区分ごとの有価証券に関する注記事項については26.と27.に記載しております。
- (4) 貸出金
貸出金は、以下の①～③の方法により算出し、その算出結果を時価に代わる金額として記載しております。
① 延滞債権等、将来キャッシュ・フローの見積りが困難な債権については、貸借対照表中の貸出金勘定に計上している額（貸倒引当金控除前の額。以下「貸出金計上額」という。）の合計額から貸出金に対応する個別貸倒引当金を控除した価額。
② ①以外のうち、変動金利によるものは貸出金計上額
③ ①以外のうち、固定金利によるものは、貸出金の種類および期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を平成30年3月31日を基準日とした過去3カ月の平均実行金利の利率で割り引いて算出した価額。

金融負債

(1) 預金積金

要求払預金については、決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしてあります。また、定期預金及び定期積金の時価は、一定期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定し、その算出結果を時価に代わる金額として記載しております。その割引率は、平成30年3月31日を基準日として過去3カ月の平均実行金利の利率を用いております。また、定期預金及び定期積金満期経過分については、将来のキャッシュ・フローの見積もりが困難なため、帳簿価額としてあります。

(2) 借入金

借入金は、当金庫の信用状態が実行後大きく異なっていないことから時価を帳簿価格としてあります。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の貸借対照表上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報には含めておりません。（単位：百万円）

区 分	貸借対照表計上額
非上場株式(*1)	28
投資事業組合等出資金(*2)	53
合 計	81

(*1) 非上場株式については、市場価格が無く時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(*2) 投資事業組合等出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額 （単位：百万円）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
預け金(*1)	48,012	38,400	6,000	16,000
買入金銭債権	-	-	100	-
有価証券				
満期保有目的の債券	-	-	-	-
その他有価証券のうち 満期があるもの	10,102	40,068	39,911	-
貸出金(*2)	26,562	36,567	20,474	29,602
合 計	84,676	115,035	66,485	45,602

(*1) 預け金の内流動性預け金は、含めておりません。

(*2) 貸出金の内延滞債権等将来のキャッシュ・フローの見積りが困難な債権は、含めておりません。

(注4) 有利負債の決算日後の償還予定額 （単位：百万円）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
預金積金(*)	122,087	50,874	8	363
借入金	-	1	-	-
合 計	122,088	50,874	8	363

(*) 預金積金の内満期経過の定期預金、定期積金及び要求払預金は、含めておりません。

26. 有価証券の時価及び評価差額に関する事項は次のとおりであります。これらには、「国債」、「地方債」、「社債」、「株式」、「その他の証券」を含めております。27.も同様であります。

また、時価を把握することが極めて困難と認められる有価証券は含めておりません。

その他有価証券 （単位：百万円）

	種類	貸借対照表 計上額	取得原価	差額
貸借対照表 計上額が取得 原価を超えるもの	株 式	698	427	270
	債 券	86,226	84,218	2,007
	国 債	9,507	9,252	254
	地 方 債	19,729	19,214	515
	社 債	56,989	55,751	1,238
	そ の 他	3,091	2,796	295
貸借対照表 計上額が取得 原価を超えないもの	小 計	90,017	87,443	2,573
	株 式	384	415	△30
	債 券	5,464	5,478	△14
	国 債	-	-	-
	地 方 債	1,003	1,006	△2
	社 債	4,461	4,472	△11
合 計	そ の 他	4,648	4,888	△239
	小 計	10,497	10,782	△284
	合 計	100,514	98,226	2,288

27. 当事業年度中に売却したその他有価証券 （単位：百万円）

	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	361	132	-
その他(*)	638	169	-
合 計	1,000	301	-

(*) その他には投資事業組合等の純損益を当金庫の出資持分割合に応じて株式等売却益または株式等売却損として計上した額および投資信託等の解約金額は含めておりません。

28. 当座貸越契約は、顧客からの融資実行の申出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、37,382百万円であります。このうち契約残存期間

が1年以内のものが8,341百万円となっております。

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当金庫の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当金庫が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができ旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定められている金庫内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

29. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、それぞれ次のとおりであります。

繰延税金資産	
賞与引当金	37百万円
貸倒引当金	383
役員退職慰労引当金	30
退職給付引当金	379
減価償却費	17
減損損失	33
偶発損失引当金	21
その他	59
繰延税金資産小計	960
評価性引当額	△443
繰延税金資産合計	517

繰延税金負債

その他有価証券評価差額金	634百万円
その他	0
繰延税金負債合計	634
繰延税金負債の純額	116百万円

報酬体系について

1. 対象役員

当金庫における報酬体系の開示対象となる「対象役員」は、常勤理事及び常勤監事をいいます。対象役員に対する報酬等は、職務執行の対価として支払う「基本報酬」及び「賞与」、在任期間中の職務執行及び特別功勞の対価として退任時に支払う「退職慰労金」で構成されております。

(1) 報酬体系の概要

【基本報酬及び賞与】

非常勤を含む全役員の基本報酬及び賞与につきましては、総代会において、理事全員及び監事全員それぞれの支払総額の最高限度額を決定しております。

そのうえで、各理事の基本報酬額につきましては役位や在任年数等を、各理事の賞与額については前年度の業績等をそれぞれ勘案し、当金庫の理事会において決定しております。また、各監事の基本報酬額及び賞与額につきましては、監事の協議により決定しております。

【退職慰労金】

退職慰労金につきましては、在任期間中に毎月引当金を計上し、退任時に総代会で承認を得た後、支払っております。

なお、当金庫では、全役員に適用される退職慰労金の支払いに関して、主として次の事項を規程で定めております。

a. 決定方法 b. 決定時期と支払時期

(2) 平成29年度における対象役員に対する報酬等の支払総額 （単位：百万円）

区分	支払総額
対象役員に対する報酬等	140

(注) 1. 対象役員に該当する理事は7名、監事は1名です(期中に退任した者を含む)。
2. 上記の内訳は、「基本報酬」117百万円、「賞与」3百万円、「退職慰労金」19百万円となっております。

なお、「賞与」は当年度中に支払った賞与のうち当年度に帰属する部分の金額(過年度に繰り入れた引当金を除く)と当年度に繰り入れた役員賞与引当金の合計額です。

「退職慰労金」は、当年度中に支払った退職慰労金(過年度に繰り入れた引当金を除く)と当年度に繰り入れた役員退職慰労引当金の合計額です。

3. 使用人兼務役員の使用人としての報酬等を含めております。

(3) その他

「信用金庫法施行規則第132条第1項第6号等の規定に基づき、報酬等に関する事項であって、信用金庫等の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与えるものとして金融庁長官が別に定めるものを定める件」(平成24年3月29日付金融庁告示第22号)第3条第1項第3号及び第5号に該当する事項はありませんでした。

2. 対象職員等

当金庫における報酬体系の開示対象となる「対象職員等」は、当金庫の非常勤役員、当金庫の職員であって、対象役員が受ける報酬等と同額以上の報酬等を受ける者のうち、当金庫の業務及び財産の状況に重要な影響を与える者をいいます。

なお、平成29年度において、対象職員等に該当する者はいませんでした。

- (注) 1. 対象職員等には、期中に退任・退職した者も含めております。
2. 「同等額」は、平成29年度に対象役員に支払った報酬等の平均額としております。
3. 平成29年度において対象役員が受ける報酬等と同額以上の報酬等を受ける者はいませんでした。